



写真に写った人々、風景は、封じ込めた時間を越えて何かを語りかけてきます。その感想は、おそらく見る人それぞれが経験してきた楽しい時、悲しみ、あるいは記憶の重さ、大切な時間の大きさに比例するのかも知れません。流れる時間の瞬間、ふと立ち止まったような人々のポーズ。一瞬を「そっと」切り取ったような作品は、「あなたにとって、この写真は何を話してくれますか？」と問いかけているようです。

JR北海道の社内誌「THE JR Hokkaido」に3年間連載してきた「忘れがたき駅前ふるさと」が今年3月に終わり、北海道とそこに暮らす人の営みを見つめたテーマの新たな取材が始まっています。

プロ写真家として取り組んだ初の本格的長期取材・連載テーマでした。「開拓とかつての繁栄の地で今もなお根付いて生きる人々の生きざまの記録」が取材コンセプト。JR北海道ローカル線の駅前風景を1枚の白黒写真と自身のエッセイの中に凝縮しています。

「増毛湯」。石炭、木材の切り出し積み出し港、あるいはしん漁などの前浜漁業の港町としてにぎわった増毛の町の一角に、賑わいを時のかなたに封じ込めたかのようにたたずんでいた小さな古びた銭湯。

脱衣場には、宣伝文句が書かれた広告主のいない古い広告看板。番台のおばあちゃんが一人でお客さんが来るのを待っています。写真家としての今ある活動の基盤を作った作品群になったようです。

「自分がここに移り住んできた理

由を探したい。ここにいる正当性を証明したい」。魅せられ、そして選んだ地をテーマに撮り続ける作品の数々は、自分らしく生きることを探し求めてきた心の旅、あるいは自身の心象世界の表現かもしれません。ストリートギャラリーコンテスト

でグランプリ受賞した作品「アイデンティティ」は、大雪山旭岳の山開きで、地元アイヌの人々が山の無事故を願って神に祈りをささげるヌプリコロカムイノミの儀式を撮影した作品。写し出された人々の表情は私たちに静かに、しかし鋭く問いかけてくるものがあります。

町内で生まれた赤ちゃんの生後100日祝いの記念写真、おじいちゃん、おばあちゃんの傘寿記念の記念写真も撮り始めています。

「撮影を通じて普段接することのないいろいろな人たちと知り合っていくきたい」。

天人峡、旭岳へと続く道道沿いの自宅前には、約600平方メートルの空き地が広がっています。ここで写真ギャラリーかカフェを開くのが目下の夢です。

旭岳山開きの儀式「ヌプリコロカムイノミ」=作品「アイデンティティ」から



自宅



愛機のドイツ製二眼レフカメラでスナップ撮影

作品「モノクロームの刻(とき)」から増毛湯の番台に座るおばあちゃん



いづか たつお  
飯塚 達央さん/写真家/35区 ☎82-6080

大阪市出身、40歳。静岡大卒。インテリアメーカー(本社名古屋)に入社後、「写真を撮りたい」と約3年半で退職。ワンボックスカーで半年間の国内写真撮影の旅を始めました。学生時代にバイクツーリングで2回訪れていた道内を巡るうち、美瑛の丘の風景に魅せられました。写真を撮り続けているうち、写真館カメラマン募集を見つけて定住を決意。1996(平成8)年、美瑛と富良野の中間地点、上富良野町内にアパートを借りて写真館勤めと自らの作品撮影を始めました。その後美瑛町内の古い農家を借りて移住、フリー写真家として本格的に独立。そのころ美瑛町内のペンションでアルバイトに来ていた大阪出身の真里子さんと知り合い結婚。2005(同17)年、たまたま空き家になった現住宅を購入して東川町に転居しました。現在はプライダルフォト撮影、コマーシャルフォト撮影を中心に、年間1~2回の個展も開いています。今年の2008フォトフェスティバル・ストリートギャラリーコンテストで、作品「アイデンティティ」(デジタル12枚組写真)がグランプリ受賞。今年4月から東川フォトクラブ事務局長。ホームページのURLは<http://www.photoseason.net/>